

The Time to Baptisma

E'S

結賀とろ



E'S

The Time to Baptisma

1999年3月19日 初版発行

著者



結賀さとる

挿画



結賀さとる

発行人



福島康博

発行所



 株式会社 **エニックス**

〒151-8544

東京都渋谷区代々木4-31-8

営業 03(5352)6441

編集部 03(5352)6432

印刷所



凸版印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替え致します。
定価はカバーに表示しております。

©1999 Satoru Yuiga

©ENIX 1999, Printed in Japan

ISBN4-87025-474-3 C0293

The Time to Baptisma

E'S

結賀とる



ISBN4-87025-474-3

C0293 ¥857E

定価: 本体857円 + 税



株式会社 エニックス

超巨大企業アシュラムの特殊部隊に属する超能力を持った少年・少女たちは自らの庇護者の命じるままに戦いを続けていた。それは、彼らにとって正義であり、それだけが真実だった。
戒=玖堂は、アシュラムで様々な事件を経て様々な真実を知る——。それはやがて訪れる悲劇の前奏曲だった。そして、やがて彼と出会う運命の勇墓=篤川もまた、運命の波に翻弄され始めていた——。
人気コミック待望のノベライズ第1弾——!!



G-FANTASY NOVELS

E'S

The Time to Baptisma

Novel: 結賀さとる

Gファンタジーノベルズ

Illustration

結賀さとる

E'S

The Time to Baptisma

CONTENTS

キャラクター紹介	6
プロローグ	9
第1章	21
第2章	113
第3章	141
第4章	171
エピローグ	224
あとがき	230



ヒカル クドウ
光流=玖堂



カイ クドウ
戒=玖堂



シン ルー
神露=ベルヴェディア



シェン ロン
神龍=ベルヴェディア

C H A R A C



アスカ トクガワ
明日香=篤川



ユウキ トクガワ
勇基=篤川



ルリ
瑠璃



エイジ サガミ
曳士=鷺宮

企業が、かつてのように

単純な営利追求団体としてではなく存在する今日にあつては、

民間企業は「民間」という名で呼ぶのもふさわしくないほどに肥大し、その役割が拡大していた。

その原因が、第三次世界大戦と言われた

世界中の国家を巻き込んでの大きな戦争に

起因していることは議論の余地がなかったが、

先の大戦は結果として国家という枠組みを非常に緩やかなものとし、

人民はむしろ企業に帰属する意識を強めていった。

教育、治安、警察……そういった、旧国家体制が担っていた分野を

巨大コングロマリットが代替するに至り、国家は事実上解体しつつあった。

それは全世界的な動きであり、地域によりずいぶんと差異はあったが、

新しい枠組みにスムーズに移行できない地域は、

新時代の南北問題の「南側」の地位に甘んじざるを得なかった。

——そして、穏やかな世紀が訪れた。

プロローグ

（ここは、星が見えないんだな……）

誰に……というのでもなく、むしろ誰かがそばにいたとしても聞き逃してしまうかのような声がつぶやく。

巨大都市の高層ビル街の中にあつて、最も高いビルの屋上、冷たい風が吹き抜けるこの場所からも、星はわずかにしか見えなかった。

（曇ってるわけじゃないのに）

しばらく空を見上げては見たものの、星の少ない理由はわからなかった。自分の記憶の中にある星空は、こんな弱々しい光しか放たないようなものではなかったはずだ。

——記憶？

（ここで生まれてここで育ったのに？　いつ見たっていうんだ？）

自嘲気味に笑って、すぐに思い直す。

（記憶……じゃない）

繰り返す。

言い聞かせるように。自身に確認する。

(記憶じゃない……これは。いつか……本や映像で見たっただけの……)

強い風の音がそれを遮った。

「戒」

戒の背後に黙って立っていた曳士が穏やかな調子で彼の名前を呼んだ。

「あ……！ はい！」

慌てて振り返る戒に、緊張をほぐすよう促しながら曳士は数歩、歩み寄った。

仕立てのいいロングコートとダークブラウンのスーツを着こなす姿は、とても『ビジネスマン』とは言い難い。そもそも彼をそう呼ぶべきか考へものではあるのだが、民間企業体『アシラム』の一構成員である曳士は、かつての言い方を用いられつきとした『社員』——『ビジネスマン』と呼べなくなかった。

「犯人のパーソナルデータは頭に入っているね？」

「……大丈夫です」

戒はつまらなさそうに答えた。

曳士には、それが戒の緊張の現れであることがわかっている。

「大丈夫。君の力ならできる。シミュレーション訓練の時のように落ち着いて臨めばいい」
自分の言葉がどれほど耳に届いているのか？ 目の前の戒から神経質な気配が和らぐことがないのを察した曳士は、やや困ったかのように微笑んで――

「――いいよ。使っていいから」

自分のコートの胸ポケットを指さしながら、言った。

「持ってきてるんだろう？ あれ……」

「でも――！」

戒は曳士に顔を向けないまま、ハーフコートの内ポケットにしまっていた携帯MDを取り出す。曳士の氣遣いと言葉は、戒の緊張をほんの少しだけ軽くはしたが、同時に落ち込ませる原因をも作った。

「……最初の単独任務なのに、これじゃあ……」

その続きは口にしたくなかった。言葉にしたら、もっと落ち込むことになるだろう。

「初めて――だからね。今回に限り許可してあげるよ。次からは当然なしたが、それを聴きなげらなら、やれる自信は、あるかい？」

「……と、思います。いえ、やれます！」

これ以上、曳士に自分の力不足を晒すのは嫌だった。

「じゃあ…始めよう」

「はい」

MDのイヤフォンを耳にかけ、再生ボタンに触れる。

ラフマニノフのピアノの旋律せんりつが流れ始めた。

曳士はサングラスをかけ直すと、戒を氣遣きづかうように少し距離を取って見守ることにした。外界の音を断たって集中力を高め、音楽とベオリंकする。戒の能力ちからを引き出すのに最も効果的な手段だった。軍で奨励されている手法ではないが、戒にはこの方法がいい——曳士は訓練期間にこの少年の肉体と精神について、本人以上に熟知するに至っていた。

戒は高層ビルの屋上から、見えるはずのない下の何かを見つめるように、じっと動かなかった。やがて目を閉じ、集中力をさらに高めていく。

『要は想像力の問題だ』

——と以前、曳士と彼のスタッフは戒に教えた。

『君にはイメージを実体化する力…そして捉とらえることができるができないはずの実体をイメージに変換する力がある』

曳士はそれを『特別な力』と呼んだ。

その能力ちからの存在自体はかなり昔：旧世紀より認知されていたが、人々はそれを擲揄やゆし、見せ物としてしか受け止めなかった。

そう——現実じゆんじつに、その能力ちからを持つ人間が、ある一定以上の、無視することができないほどの数、認知されるまでは。

やがて人々の擲揄やゆは嫌悪へと変わっていく。

人の心を読み、見えないはずのものを、行けないはずの場所に達する能力ちから。

何よりも人を恐怖させたのが、触れずしてものを破壊する——つまり、武器を持たずして人を殺める能力ちからだった。

そして、現代の魔女狩りさながらに、彼らは摘発され殺されていく。殺されるまでに至らずとも、迫害——ですめば、まだ幸運であるとの見方すらあった。行き過ぎた人種問題——いや、かつてのそれと比較すると虐げられる側の人間があまりにも少数であり、また個体としては通常の人間よりも優性であるのかもしれない——その問題はいかなる人種問題よりも切実な対立関係を予兆させた。

曳士いしは、その虐げられた優勢な個体を集めたのだ。

彼を、異様なまでに若い『アシシラム』のエリート幹部たらしめている功績は、そこにあった。

戒を含む——数十人以上と言われている少年・少女たち。『アシュラム』の豊富な資金力と人員を無制限に投入することによって、それは成功した。

時遅くして、彼の手に入れた力が圧倒的なものになりうると気づいたほかの勢力が同じ試みに挑もうとしたが、いま現在のところ、彼我の差は埋め難いほどに広がってしまった。

「見つけました」

戒は抑揚のない声で曳士に告げた。

「戒、相手の力はわかるか？ データ通りなら、そのまま次の行動に移ってくれ」

「データで読んだ通りの：ランクD、Eの能力者だと思えます。間違いありません。問題はないと…思います。行きます」

問題はない——とは戒のポテンシャルが相手の能力を十分に上回っていることを指していた。再びターゲットである人物に意識を集中させていく。

相手は未登録能力者、反政府ゲリラの一員であり、昨日警察に踏み込まれた際、警官を二人殺害している。一人は銃で、もう一人は能力を使って『圧死』させている…。

戒が、心情的にはむしろ犯人に同情していることは曳士にはわかっていた。

自分が役に立つ人間であることを証明したい気持ちと、自分の力で誰かを傷つけてしまうことを恐れる気持ち——その両方を、戒は自分の裡に抱えている。

だが、戒が自分に逆らうことなどできない……それは曳士の確信だった。

「曳士さん——ターゲットが……犯人の鼓動が緩やかに……多分、追っ手を振りきったと思ってるのかもしれない。きつと、今いる場所でP S Y シールドを解除するんだと思います。犯人がシールドを解除したら捕獲します」

戒は曳士の返事を待たずして行動に出た——とは言え、そこから一歩たりとも動くわけではない。頭の奥に見えている犯人と、その周囲の風景がより鮮明に見て取れるようにピントを絞る。今にも力尽きそうな街灯が、犯人の逃げ込んだ公園を、闇に変えるかと思うと、また照らし出した。

「……」

（集中……しにくいな）

寿命の近い街灯のせいで集中しにくい。

まるで、保存状態の悪い旧式の映像を回したみたい……頭の中の画像はブツブツと切れる。戒が数秒、躊躇している間に肩で息をしていたはずの犯人の呼吸も落ち着きを取り戻し、その手は渴いたのを潤すために水道の蛇口へと伸ばされていた。